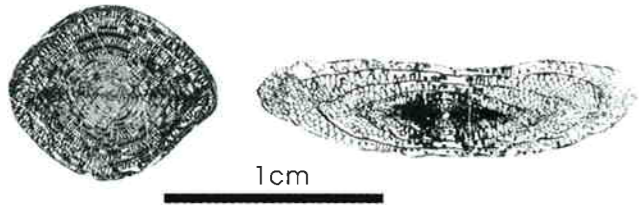


古生代の佳人たち

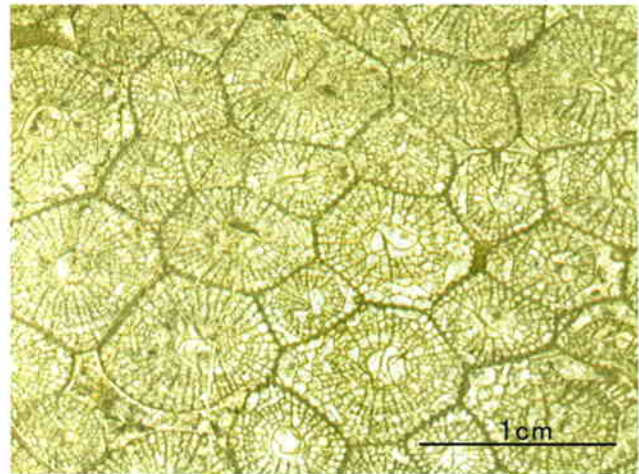


ヤベイナ (左)、パラフズリナ (右) (フズリナ類、ペルム紀)
フズリナ化石は地層の年代決定や比較に重要です。当館の所蔵するフズリナ化石を含む石灰岩薄片 (小林文夫コレクション) の一部も展示されます。

化石の面白さのうちの大きな要素は、現代の生物とは異なったものが、別の言い方をすれば、変な生き物がいるということでしょうか。その意味で古生代は変な生き物の宝庫です。たとえば座ヒトデ類です。座ヒトデはウミユリと同じく棘皮動物に含まれるグループですが、ウニの殻の上にヒトデが乗ったような奇妙な殻をもっています。その他にも、一見木ねじのような殻をもったテナクチャーテス、断面で見ると個体が鎖のようにつながったクサリサンゴ、ハチの巣のような群体をつくったハチノスサンゴなど、化石ならではの生き物を企画展では多数展示します。



マクロスピリファー (腕足類、デボン紀)
腕足類の殻が密集した標本です。古生代における腕足類の繁栄ぶりをよく物語っています。



コニョカリニア (四放サンゴ、石炭紀)
四放サンゴは古生代に繁栄したサンゴの仲間です。このような群体サンゴの他、単体のサンゴもありました。



オギギヌス (三葉虫、オルドビス紀)
三葉虫の体は頭部、胸部、尾部の3つの部分から成り立っています



ジンバクリヌス (ウミユリ、ペルム紀)
ウミユリの仲間は古生代には大繁栄しました。しかし現代では「生きている化石」の状態です。



リンボク (ヒカゲノカズラ類、石炭紀)
リンボク類は石炭紀の湿地林を構成する主要な植物で、高さ30-35m、基部の直径1-2mになります。菱形の模様は葉の痕跡です。



ペロノプシス (三葉虫、カンブリア紀)
カンブリア紀からオルドビス紀にかけて繁栄した小型の三葉虫の仲間ですが、三葉虫とは別のグループだとする意見もあります。



ユーリプテルス (ウミサンリ、シルル紀)
ウミサンリはオルドビス紀に現れ、ペルム紀に滅びましたが、オルドビス紀やシルル紀には主要な捕食者の地位を占めていました。



ファコプス (三葉虫、デボン紀)
ファコプスはデボン紀の代表的な三葉虫です。この標本は複眼のようすがよくわかる保存の良いものです。



イソロプス (赤矢印、座ヒトデ、オルドビス紀)
座ヒトデ類はウニやウミユリと同じ棘皮動物の仲間です。ウニの上にヒトデが乗ったようなおもしろい形をしています。



スティグマリア (ヒカゲノカズラ類、石炭紀)
リンボク類の根状器官をスティグマリアといいます。表面にはらせん状に細根の痕跡が残っています。



テナクチャーテス (ネジのような形、所属不明、シルル-デボン紀)
軟体動物の仲間とも考えられていますが、よくわかっていません。